



したがって神は存在する

いきなり引用からいってみよう。

*

カントのこのテーゼは、いわゆる<神の存在の存在論的証明>（天野訳では<実体論的証明>と訳されていた）の論駁のなかで持ち出されてくる。中世のスコラ哲学者たちによってはじめられた<神の存在証明>とは、神が存在するか否かを問題にしようというものではない。彼らにとって神が存在していることには疑問の余地がない。それをいかに論理的に論証してみせるかが問題なのであり、いわば一種の論理ゲームなのである。だが、一方で彼らは、もっとも完全な存在者である<神>をモデルにして、<ある><存在する>ということの意味を問い究めようとしていたのだとも見ることができそうである。

さまざまに試みられたその存在証明のなかには<存在論的証明>と呼ばれるものがある。それは、簡単に言えばこういうものである。つまり、<神はもっとも完全な存在者である。ということは、神はすべての肯定的な規定（「神は全能である」「神は無限である」…）をそなえた存在者だということである。ところで、「存在する」ということも一つの肯定的規定である。神は当然この規定もそなえている。したがって、神は存在する>というものである。

ただの言葉のまやかしのようにはしか聞こえないであろうが、この存在論的証明には中世から近代にかけての永い歴史がある。この証明は、最初十一世紀にアンセルムスによって

提唱され、十三世紀にトマス・アクィナスによって否定され、十七世紀にデカルトによって復活され、十八世紀にカントによって否認され、十九世紀初頭にヘーゲルによって承認されるという、実に興味深い歴史があるのである。ハイデガーはこの講義で、アンセルムスやトマスやデカルトのテキストを一々引用しながら、その歴史を詳細に跡づけてみせており、このあたりも私たちにとっては面白いのだが、それを紹介しているいとまはなさそうだ。（木田元『ハイデガー拾い読み』新潮文庫）

*

哲学の歴史を支える一つの柱が「存在論」であることは常識であるが、その中身が一部紹介されていて面白い。また、これから世界史の授業で会うことになるトマス・アクィナスなど、有名人の名前もたくさん登場していて、この本なかなか興味深いのだが、実は私は58ページ（本は全体で271ページ）で読むのを諦めた（笑）。こういうのに興味がある人は、どうかチャレンジしてほしい。

著者の木田先生は、「現代西洋哲学者の主要著作を分かりやすい日本語に翻訳したことで知られる」哲学者で、同じ新潮文庫から出ている『反哲学』も有名である。

その木田先生がご専門とされているハイデガーは、ナチスを肯定したことやハンナ・アレントとの恋愛などでも話題になった大哲学者で、主著に『存在と時間』がある。もちろん私は読んでことがない（笑）。